2021筑波大学附属駒場論集61集

課題研究「ともにいきる」プログラムの実践報告

－10年間の継続を通して　第５報－

筑波大学附属駒場中・高等学校　養護教諭
化学科、スクールカウンセラー
早貸千代子・吉田　哲也・菱山　玲子

課題研究「ともにいきる」プログラムの実践報告

－10 年間の継続を通して　第5報―

筑波大学附属駒場中・高等学校　養護教諭
化学科、スクールカウンセラー
早貸千代子・吉田　哲也・菱山　玲子

要約

高校２年時の理科課題研究／課題研究（1 単位）で開講している講座の一つである「ともにいきる」は、2011 年度から本年度で 10 年目の節目を迎えた[1)2)3)4)]。本講座は、将来を見据えた思考ができる高校生に、障害者にとっての真の障害が何かを知り、共生社会の実現に向けて探究することを目的とし開講し続けてきた。プログラムは、障害者やその家族をはじめ、教育者、研究者、医者など多岐にわたる分野、そして多様な視点から学べるように構成している。この 10 年間で受講した生徒たちの中には、「ともにいきる」講座で得た障害に関する知見を礎として、関連する様々な活動に携わる者が増えてきている。そこで、10 年間を一つの節目として、実践してきたプログラムとその変遷、および受講生・修了生の活躍をここで報告する。

キーワード：課題研究、障害科学、交流、共生

1　はじめに

日本の初等・中等教育において、「障害理解教育プログラム」は視覚障害疑似体験に代表されるように、身体障害・精神障害等に起因する「できない体験」プログラムが多い。これらのプログラムの中には、できないことを強調しすぎるあまりに、差別・排除の精神を生じかねないものが散見される[5)]。

2011 年度から始めた「ともにいきる」講座は、障害疑似体験にとどまらず、幅広い障害種別、そして多分野の講師を招き、講話、体験、交流ができるプログラム構成とし、障害者にとっての真の障害を知り、その環境を変えていける人材の育成のための内容を企画してきた。

2021 年の東京オリンピック・パラリンピックでは、障害者スポーツに端を発して、障害に対する理解が深まりつつある機運を感じるが、その年に本講座が 10 年目（対象は本校 61～71 期生、うち 62 期と 63 期は除く）の節目を迎えることとなった。

本稿では 10 年間の講座内容の変遷を振り返るとともに、ともにいきる講座をきっかけに障害にかかわる活動をしている受講生・修了生の様子をここで報告し、より良い社会を構築するために、どのような教育プログラムが有効であるのかを考えてみたい。

2　2011～2021 年度の講師及び講義内容

2.1 プログラム構成について

1 年間のプログラムを始める際に、以下の点を念頭に構成を考えている。

・多くの障害種別を対象とする
・本学・附属特別支援学校との連携をはかる
・当事者本人及び家族からの語りを入れる
・当事者との交流・対話をする
・研究者、医者、社会人、同学年、異学年等、多様な視点を入れる
・講義、体験、交流等、多岐にわたる実施形態をとる

以上の観点を踏まえつつ、毎年、プログラムの全体構成を考え、講師の都合を調整し、バランスよく組み立てるように心がけている。

講義の内容は、基本的に講師に任せているが、障害の基礎知識とともに、社会に潜在的にある障害に関する問題や課題、講師自身が高校生に知っておいてほしい内容などを盛り込んでもらうように依頼している。

2.2 10 年間のプログラムの変遷

開講当初は、すべての障害種別の特別支援学校を有する筑波大学（以下、本学）の附属学校である利点を活かして、附属大塚特別支援学校（知的障害、以下、大塚特別支

援学校）、附属久里浜特別支援学校（自閉症、以下、久里浜特別支援学校）、附属視覚特別支援学校（視覚障害、以下、視覚特別支援学校）、附属聴覚特別支援学校（聴覚障害、以下、聴覚特別支援学校）、附属桐が丘特別支援学校（肢体不自由、以下、桐が丘特別支援学校）の児童生徒や家族、そして先生方から、障害特性や当事者のリアルな生活、特別支援教育の実際等を学ぶことから始めた。

2014 年度以降は、本学の研究者や、附属特別支援学校及び本校の卒業生やその家族、そして本学以外の都立特別支援学校の教育者へ講師の幅を広げていった。特に研究分野の面では人を支援する工学技術や当事者研究、ICT を用いた情報保障など、最先端の研究にも目を向けて講師依頼をするようになった。

ここ最近は、本校の卒業生で医療・福祉・工学などにかかわっている OB や、吃音や重度うつを経験した OB を講師に招く機会を増やしている。また本講座修了生に「ともにいきる」OB スタッフとして、講座のサポートを依頼することも増え、良い循環が生じている。以下、年度ごとに変遷を記す。（年間プログラムの一覧は末尾資料参照）

2.2.1　2011 年度

身内に障害がある人がいてもカミングアウトできない生徒・保護者の存在を知り、その環境を変えるために本講座を開設したいと考えた。そこで、本学特別支援教育研究センターに外部講師の協力を依頼した。

しかし本講座のような取り組みはこれまで普通学校での実践の前例がなく、本学特別支援教育研究センターの協力は得らなかった。そこで急遽、個別に附属特別支援学校の先生方で本講座の主旨に賛同してくれた講師に依頼することとなった。

協力を得られた視覚特別支援学校の雷坂浩之氏（当時）には 2 回講義を担当していただいた。1 回目には視覚障害者の理解と弱視疑似体験を実施し、2 回目は、全盲ろうで大学に進学したばかりの森敦史氏とともに来校し、雷坂氏による触手話通訳のもと、森氏の日常や大学での生活の様子を聞くことができた。また、森氏とはコミュニケーションボード（文字盤）をツールとした対話の時間を設けることができた。

また、桐が丘特別支援学校の城戸宏則氏には肢体不自由教育（車椅子体験を含む）を、聴覚特別支援学校の鈴木牧子先生に聴覚障害（難聴疑似体験を含む）について講義していただいた。

その他、大塚特別支援学校の協力の元、文化祭「大塚祭」に参加させていただき、子どもたちの様子や先生方のかかわり方などを直接見学することができた。

初年度は、すべての授業時間分の講師が見つからず、日本全盲ろう者協会で作成している DVD『ゆずり葉』[6]の鑑賞を通して障害を学ぶ機会とした。

初年度の受講生は 5 人と少なかったが、今まで障害者と出会うことがなかった生徒が 1 年間の様々なアプローチにより、障害への認知・理解を高め、障害の捉え方を変容させていく様子が見られた[1]。

2.2.2　2014 年度

2 年目に当たる 2014 年度は初回の講師へ継続して依頼する他に、当事者や家族等、講師の幅を広げていった。

まずは、当事者からの話を直接聞く機会を増やしたいと考え、聴覚特別支援学校の鈴木氏に相談し、聴覚特別支援学校《附属聾学校（当時）》の卒業生であり、ろう者でカフェ（Social Café sign with me[7]）を営んでいる柳匡裕氏を紹介していただいた。柳氏には、聴覚障害者における就労や起業の現実、日本の福祉の現状について話をしていただいた。講義の際には日本手話通訳 2 名をつけて実施し、受講生にとっては情報保障の実際を知る機会ともなった。

また、兄弟が脳性まひで車椅子生活をしている本校卒業生及び保護者に依頼し、「肢体に不自由があるとは」と題して、本人及びご家族から話を聞く機会を設けた。

その他、大塚特別支援学校小学部の教員より、「知的障害がある子どもをもっと知ってほしい。ぜひ交流をしたい」との強い要望があり、本校科学部（顧問、吉田哲也氏）協力のもと、科学実験を通した交流を実現できた。

2.2.3　2015 年度

2015 年度は、大学の研究者に講師を依頼し、先端的な研究や取り組みを学ぶ機会を設けていった。

まず、本学学校教育局主催で実施している支援教育連携委員会の研修会にて、筆者が当時本学特別支援教育研究センターのセンター長であった柘植雅義氏の「特別支援教育」の話を聞いた。そこで、受講生にも学ばせたいと思い、柘植氏に講師を依頼した。柘植氏からは、「障害を定義することは難しい」ことや、「障害とは何なのか」等の障害学の根源となる講義をしていただいた。後半は、グループワークで「障害は個性なのか？」「知能は高ければ高いほど幸せなのか？」の問いについて考究する時間が設けられた。グループワークでは問いに関連する著書を調べ、受講生同士で議論し、まとめたものを 5 分で発表する、という障害を深く掘り下げて語り合う探究的な活動を行い、有意義な時間となった。

さらに、この年度は、東京大学先端科学技術研究センタ

ー（以下、先端研）のセンター長であり、本校卒業生でもある児玉龍彦氏に依頼し、先端研見学及びバリアフリー研究室の福島智氏（全盲ろう当事者、附属盲学校の卒業生）、熊谷晋一郎氏（小児麻痺当事者、小児科医）から話を聞く機会が得られた。

その他、Social Café sign with me の柳氏の紹介で、東京大学で鉄門手話の会（手話サークル）を立ち上げ、代表をしていた辻賢太郎氏（本校卒業生、当時医学部）に依頼し、医学部内で手話サークルを立ち上げるきっかけや聴覚障害と医療の間にあるコミュニケーションや情報保障における溝についての話を聞くことができた。

他には、視覚特別支援学校の寄宿舎と共催で、寄宿舎高等部生徒と一緒に春巻を作る機会を設けた。障害の種別や程度によって、できること・できないことがあること、それを知ったうえで個に応じたサポートが必要であること等を、実体験を通して学ぶことができた。

2.2.4　2016 年度

2016 年度は、2015 年度受講生の 1 年の振り返りレポートに記載してあった受講生の要望「ロボット工学的な人支援について学びたかった」「本学附属特別支援学校以外の状況を知りたい」をもとに講座の内容を検討した。

まず、「ロボット工学的な人支援について学びたかった」については、振り返りレポートに目を通してくれた講師から、人工知能や人支援工学が専門である、本学サイバニクス研究センターの鈴木健嗣氏の紹介があった。鈴木氏からは、人支援ロボット「HAL：Hybrid Assistive Limb」をはじめ先端的な研究の紹介のほか、障害の国際生活機能分類（ICF：International Classification of Function、Disability and Health）の捉え方、共感することの難しさ、人工知能の可能性と限界などの講義を受け、科学的な視点で障害を考究する機会となった。

「本学附属特別支援学校以外の状況を知りたい」については、本校生徒が入院治療した際に病院内学級でお世話になった、都立墨田いるか分室の佐藤比呂二氏に依頼し、重度知的障害児の教育の実際及び、院内学校の様子について話をしていただいた。

加えてこの年度は、受講生に対し、身近にも支援を必要とする人がいることを理解してほしいと考え、当時本学の副学長、及び附属学校教育局の教育長で、日本 ADHD 学会の第 7 回学会長でもあった宮本信也氏（小児科医）に講師を依頼した。宮本氏からは、発達障害の障害特性はグラデーションであり、時代や文化、環境によって生じる適応の障害であること等、最新の研究や医学的な知見から、障害特性の理解と支援の必要性について学ぶことができた。

2.2.5　2017 年度

2017 年度の新た取り組みとして、本学サイバニクス研究センターの鈴木氏と同研究センターの大木美加氏、大塚特別支援学校小学部と共同で、大塚特別支援学校の「ミライの体育館」床面プロジェクション [8] システムを活用した、小学部児童との交流会を行った。交流会を行うための事前学習として、前半は鈴木氏による人を支援する工学技術の講義、大木氏による床面プロジェクションの説明、そして大塚の教員による知的障害のある子どもの特性についての講義を行った。後半はグループワークで小学部児童と一緒に遊ぶためのプロジェクションマッピングコンテンツ制作を行った[4]。約 1 か月後の交流会では、受講生が制作したプロジェクションマッピングコンテンツを床面に映し出し、児童と一緒に遊んだ。この交流を通して、知的障害の特性や、特別支援学校の先生方の児童とのかかわり方から支援の実際を学ぶとともに、児童とともに楽しむことから障害へのイメージを変える受講生が多く見られた。

その他、新たな取り組みとして、年度途中に受講生から、「精神疾患についても学びたい」との要望があり、精神障害の講義を増やしている。講師には、保健体育の「メンタルヘルスリテラシー教育」の授業でお世話になっていた、東京大学学生相談支援室の室長であり、精神科医でもある佐々木司氏に依頼した。

2.2.6　2018 年度

ある程度プログラムが固定してきた 2018 年度は、同世代の生徒交流の機会を増やしたいと考え、視覚特別支援学校の寄宿舎指導員である飯島美帆氏の協力の元、寄宿舎へ訪問し、寄宿舎見学及び、寄宿舎生と一緒に昼食をとる企画を設けた。

また、2017 年 10 月に Windows 10 向けの無償アップデート「Windows 10 Fall Creators Update」において、モリサワの「UD デジタル教科書体」が採用された [9] ことをきっかけに、UD フォントの存在を受講生にも啓発したいと考え、㈱モリサワの高田裕美氏に依頼し、UD フォントの成り立ち及び、UD フォントを活用した名刺づくりの機会を設けた。ここで制作した名刺は、附属大塚特別支援学校小学部児童との交流において、アイスブレイクの際の名刺交換に使用した。

その他、本校保護者から英語のディスレクシアを専門に塾を展開している成田あゆみ氏の紹介があり、生徒にもディスレクシアの存在や、それによって生じる困難、そして目に見えない障害のしんどさを知ってほしいと考え、成田氏に講師を依頼した。この講座をきっかけに、生徒自身が

英語のディスレクシアの特性があることに気づき、特性に応じた学習方法を身に着けるきっかけとなった。その受講生は高校 3 年でも継続して学習障害について研究を継続していた。

2.2.7　2019 年度

2019 年 1 月に発行された本校卒業生の近藤雄生氏の著書『吃音～伝えられないもどかしさ～』[10]を読み、吃音の理解者を一人でも多くしたいと考え、近藤氏に講師を依頼した。本校にも各学年に何人か吃音と思われる生徒はおり、吃音の理解啓発も兼ねて、受講対象の高校 2 年生だけでなく、全校生徒・保護者への公開講座とした。

その他、この年度は聴覚特別支援学校の交流担当教員から「他校に学校訪問をする機会がほとんどないので、駒場に学校訪問したい」との要望があり、例年 1 回だった交流を 2 回にし、本校で実施した。

1 回目は例年通り、聴覚特別支援学校（国府台）に訪問し、ジェスチャーゲームや聴覚障害者あるあるクイズなどのグループワークをして交流を深めた。終了時には、次の機会に会うまでに簡単な手話を覚えようという意欲が見られる生徒もいた。

2 回目は、本校を会場に、異なる言語をもつ仲間（手話言語者と音声言語者）が協力して謎を解く『異言語脱出ゲーム』11）交流会を実施した。『異言語脱出ゲーム』は異言語 lab.の菊永ふみ氏（聴覚特別支援学校卒業生）らが開発した脱出ゲームで、本校物理科の課題研究（担当教諭、今和泉卓也氏）メンバーと菊永氏らの協力のもと実施した。手話者でないとわからない謎（指文字など）や聴者でないと解けない音の謎（本校物理課題研究受講生が制作）など、校内各所に謎を仕掛け、両者が協力して謎を解いて歩いた。ともに謎を解くという目的に向かって、両者のコミュニケーションが自然と楽しく育まれ、ゲームが終了するころには両者の気持ちがほぐれている様子が見られた。

2.2.8　2020 年度

2020 年度は新型コロナウイルスの感染拡大により、授業形態が大きく変化した 1 年となった。

1 学期は対面での授業は実施できず、Google Classroom による課題や今までの講座の動画、オンライン授業など、その時の社会状況に応じた展開をおこなった。

2 学期は学校全体が対面授業となり、本講座も感染症対策を講じた上で対面とオンライン併用のハイブリット型講座をした。10 月には、中学 1 年のクラスでパラリンピックの文化祭展示の準備をしていたので、パラリンピック運営委員を務めていた近藤邦夫氏やパラリンピックでブラインドサッカー日本チームのコーチをしている山本夏幹氏に依頼し、高校 2 年受講生と中学 1 年生有志が一緒に受講をする機会を設けた。

感染拡大が落ち着いてきた 12 月には、筑波技術大学（視覚障害・聴覚障害に特化した大学）の名誉教授であり、東京オリンピック・パラリンピックに向けた成田国際空港のユニバーサルデザイン（以下、UD）推進委員会の有識者メンバーの一人でもある須田裕之氏（本校卒業生）と、同推進委員会の空港関係者である山田浩介氏の二人に講師を依頼し、成田国際空港の UD 実現に向けた具体的な取り組み [12]について話を聞く機会を設けた。障害者、有識者、空港関係者などで構成される UD 推進委員会の設立や、当事者参加による現場視察や議論を踏まえた UD の推進の取り組みは、今後の共生社会の実現を考究する際のヒントが多くあった。

この年度は、性的マイノリティや HIV 感染症をテーマとした講義を新たに追加した。世界保健機関（WHO）が 2019 年、性同一性障害を精神疾患の分類から外すことを決定したこともあり、性的マイノリティを本講座で取り上げることに懸念はあったが、多様な人との調和を目指している「ともにいきる」の主旨としてはぜひ取り入れたい内容と考え、実施に至った。

講師選定にあたっては、本講座修了生で大学進学後も「障害者のリアルに迫る」東大ゼミ [13]の運営をしている乗濱俊平氏（本校卒業生）に相談したところ（3.3.4 参照）、子どもを育てる LGBT 団体「にじいろかぞく」[14]を紹介があった。その後、同団体に講師依頼をし、青山真侑氏が講師を担当してくれることになった。青山氏からは、多様な家族のかたちをテーマに、成育歴や同性カップルの家庭の様子や当事者の現状など多岐にわたる話を聞くことができた。

HIV 感染症については、感染症専門医である国立国際医療研究センターの塚田訓久氏に依頼し、免疫不全症候群（AIDS）の医学的な見解と、社会による HIV 患者への誤解と偏見などの話を聞くことができた。

この年度は、新型コロナウイルス感染症の影響で、講師が都府県をまたぐ移動ができない状況であったが、逆に交通費と移動時間をかけずにオンラインでの実施が可能となった。近藤氏（吃音）や渡邉慶一郎氏（東京大学学生支援室室長、精神科医）、鈴木氏（本学サイバニクス研究センター）にはオンラインで講師を依頼し、プログラムの内容がほぼ例年通りに実施ができた。

感染不安で登校できない生徒もおり、対面とオンラインを併用しつつ、可能な限り学びを止めない形で授業を実

施してきた。コロナ禍で不確実なことが多い 1 年であったが、遠方にいる講師に移動時間を気にせず依頼できた。オンラインだからこそ見出すことができた新しい授業形態であり、今後も状況に応じて臨機応変に取り入れていきたい。

2.2.9　2021 年度

講座を続けていく中で、本校卒業生には福祉にかかわる医師や研究者、障害当事者がいることが徐々にわかってきた。そこで、10 年目にあたる 2021 年度は中條麟太郎氏（東京大学在校生）、與那覇潤氏（博士、学術）、須田裕之氏（筑波技術大学　名誉教授）、小崎慶介氏（心身障害児総合医療療育センター所長）の本校卒業生 4 名を講師に招いたプログラムを構成した。

中條氏（東京大学）は本講座の修了生で、修了生を講師に招くのは初めての試みとなった。中條氏は大学進学後も、陸上競技用下肢義足等を研究開発している山中俊治研究室に所属し、自身も聴覚障害者と情報保障について研究している一人である（3.3.3 参照）。中條氏からは障害とデザインという視点で、自身の研究の紹介とともに、本校生の知性と能力をぜひ障害分野で生かしてほしいとのメッセージが送られた。

須田氏には、昨年に引き続き成田国際空港における UD の取り組みについて講義を依頼した。須田氏から、UD 推進委員メンバーで研究者・起業家・障害当事者である(株)UDIT 会長の関根千佳氏、空港関係者である田中幸司氏、聴覚障害当事者で UD アドバイザーの松森果林氏、発達障害を手がかりに UD コンサルタントをしている橋口亜希子氏の紹介があった。それぞれの立場から、自身の研究や活動、及び UD 推進委員会での取り組みについて語っていただいた。成田国際空港で実現した「カームダウン・クールダウンルーム」「UD トイレ」等具体的な取り組みの紹介もあった。様々なテーマに対して、多様な立場の方から、多様な視点で議論をし、「安全・安心（事故防止）」「誰もがわかりやすい（空間認知）」「誰もが使いやすい（ユーザビリティ）」を具体化していったプロセスは、本講座が目指している共生社会の実現にとって重要な観点であり、学ぶことが多くあった。関根氏からは「かわいそうな障害者のための UD であると思っていたら大間違い」との指摘を受け、明日は自分も障害がある状態になるかもしれない、という当事者の立場にあった視点で UD を考究することができるようになった。（この回はスーパーサイエンスハイスクール事業の一環として実施した）。

與那覇氏には、発達障害のある子ども・若者の放課後余暇活動の研究をしている金子浩平氏（金子書房）が主宰しているボードゲーム体験会に参加したときに同席したことを機に講師を依頼した。與那覇氏は『心を病んだらイケナイの？～うつ病社会の処方箋～』『知性は死なない～平成のうつを越えて～』の著者で、自身のリワークデイケア時にボードゲームを取り入れたリハビリを経験されていた。講義では自身の治療を通して、多様な人（患者）と行ったボードゲームの経験をもとにボードゲームの有効性などについて語っていただいた。実際に紙とペンだけでできるボードゲームの体験を行った。與那覇氏は「相手がもっている自分とは違う時間感覚を尊重しあうこと」について言及され、共生を考える大切な視点を得ることができた。

小崎氏からは、バリアフリーや重度重複障害児のスポーツ活動、日本における制度、及び障害児者に使いやすい楽器装置の開発等の科学技術の応用について話題提供があった。実際に研究開発に携わっている電子楽器サイミス（Cymis）の装置の実演があり、医学と工学、教育の観点から学ぶことができた。

さらにこの年度は、例年 1 回のみであった附属大塚特別支援学校小学部との交流会を 2 回に増やすことを試みた。1 回目の交流は 12 月のお楽しみ会（クリスマス会）に参加する形で行い、2 回目は高校生が大塚の児童たちのために制作したプロジェクションマッピングを活用した交流会を行った。事前交流会を設けることで、例年にも増して、子どもたちの実態に沿ったプロジェクションマッピング制作を行うことが可能となっていたので、今後も継続したい。

2021 年度のプログラムは以下のとおりである。

第 1 回「障害とデザイン」「聴覚障害者と情報保障」
　　東京大学　中條　麟太郎　氏（OB）
第 2 回「ブラインドサッカー・視覚障害を理解する」
　　視覚特別支援学校　山本　夏幹　氏
　　（パラリンピック、ブラインドサッカーコーチ）
第 3 回「免疫不全症候群（AIDS）を通して、とも
　　にいきるを考える」
　　国立国際医療研究センター
　　感染症専門医師　塚田訓久氏
第 4 回「肢体不自由のある本人・家族のお話・交流」
　　（OB のご家族も含む）
　　「肢体不自由があるとは」
　　桐が丘特別支援学校卒業生、
　　桐が丘特別支援学校　石田周子　氏
第 5 回「『LGBTQ』を使わないで」
　　茨城県人権教育講師　河野　陽介　氏

「聴覚障害を知ろう、手話教室」
本学 水江 光希 氏
（聴覚特別支援学校卒業生）
第 6 回「発達・精神障害の支援」
東京大学 准教授 渡邉 慶一郎 氏
第 7 回「双極性障害の当事者として～」
博士（学術） 與那覇 潤 氏（OB）
第 8 回 情報保障と UD、当事者参加
「工学技術と聴覚支援、UD」
筑波技術大学 須田 裕之 氏（OB）
「情報の UD」
（株）UDIT 関根千佳氏
「発達障害を通して障害とは何かを問う」
橋口亜希子個人事務所代表 橋口亜希子氏
「音のない世界と音のある世界をつなぐ」
UD アドバイザー 松森果林 氏
「成田空港での UD 推進の取組」
成田国際空港株式会社 田中 幸司 氏
第 9 回「工学的な人支援」
本学サイバニクス研究ｾﾝﾀｰ 鈴木健嗣 氏
「大塚特別支援学校小学部のお楽しみ会」参加
第 10 回「肢体に不自由について考える」
心身障害児総合医療療育センター所長
小崎慶介 氏（OB）
第 11 回「プロジェクションマッピングを活用した交流」
大塚特別支援学校（知的障害）小学部と交流
第 12 回「聴覚に障害がある高校生との交流」
「情報保障と要約筆記の体験学習」
聴覚特別支援学校高等部 1-2 年生

2.3 障害種別ごとの講師(講座)

この 10 年間のプログラムで登壇した講師を障害種別・分野ごとにまとめた。

2.3.1 障害科学総論

・桐が丘特別支援学校 城戸宏則 氏
「特別支援教育・肢体不自由教育（総論）」（2014）
・大塚特別支援学校長 教授 柘植雅義 氏
「障害とは何か？発達障害とは（総論）」「グループワーク・発表」（2015-2019）
・本学 副学長・小児科医 宮本信也 氏
「障害とは」発達障害を通して理解する（2016-2021）
・東京大学先端科学技術研究センター所長
児玉龍彦氏（本校 OB・19 期）
「科学の見通しとバリアフリーについて」
・パラリンピック運営委員 近藤邦夫 氏
「パラリンピックと共生社会」（2020）

2.3.2 発達障害・学習障害

・大塚特別支援学校 安部博志 氏
「発達障害について」（2014）
・日本発達障害ネットワーク代表 橋口亜希子 氏
「発達障害を通して障害とは何かを問う」（2021）
・もじこ塾（英語教育） 成田あゆみ 氏
「英語のディスレクシアについて」（2018）

2.3.3 精神障害

・東京大学学生相談支援室 教授 佐々木司 氏
「精神障害の基礎知識を学ぶ」（2017）
・東京大学学生相談支援室 准教授 渡邉慶一郎 氏
「発達・精神障害の支援」（2020-2021）
・博士(学術) 與那覇潤 氏（本校 OB・46 期）
「双極性障害の当事者として」（2021）

2.3.4 視覚障害

・視覚特別支援学校 雷坂浩之 氏
「視覚障害の擬似体験」（2011）
・視覚特別支援学校 卒業生 森敦史 氏（全盲聾）
「文字盤を活用した交流、指文字の講習」（2011）
・特別支援教育センター 間々田和彦 氏
「特別支援のノウハウを生かした理科実験」（2011、2014）
・本学特別支援研究センター 宮崎善郎 氏（2014）
「視覚障害（者）について」「弱視擬似体験」
・視覚特別支援学校 寄宿舎指導員 飯島美帆 氏
「視覚障害（者）理解」「弱視擬似体験」（2015-2018）
・視覚特別支援学校 山口崇 氏（2019）
「視覚障害（者）について」「弱視擬似体験」
・視覚特別支援学校 山本夏幹 氏
「ブラインドサッカー・視覚障害を理解する」（2020-2021）
・東京都盲ろう者支援センター 渡井秀匡 氏（難聴、全盲当事者）
・東京都盲ろう者支援センター 渡井真奈 氏（盲ろう向け通訳・介助者）
「盲ろう者を知ってますか」（2020）

2.3.5 聴覚障害

・聴覚特別支援学校 鈴木牧子 氏
「聴覚障害と口話・読話」「難聴擬似体験学習」（2011、2014-2019）
・聴覚特別支援学校卒業生 柳匡裕 氏（ありがとうの種

及び Social Cafe　Sign with Me オーナー ）
「ろう者が起業するということ～当事者問題をビジネスで解決する～」（2014-2019）日本手話通訳２名あり
・異言語ラボ 代表 菊永ふみ 氏
「聴覚障害者との交流について」（2020）
・UD アドバイザー 松森果林 氏
「音のない世界と音のある世界をつなぐ」（2021）
・筑波技術大学 名誉教授
須田裕之 氏（本校 OB・20 期）（2020-2021）
「工学技術と聴覚支援、UD」
・東京大学医学部 鉄門手話の会代表
辻賢太郎氏（本校 OB・58 期）
「聴覚障害と医療-その溝を埋めるには-」（2015）
・東京大学 中條 麟太郎 氏（本校 OB・66 期）
「障害とは」「聴覚障害者と情報保障」（2020-2021）
・日本ろうあ協会制作の映画「ゆずり葉～君もまた次のきみへ～」DVD 鑑賞 （2011、2016-2020）

2.3.6　肢体不自由

・桐が丘特別支援学校　城戸宏則　氏（2011、2014-2016）
・桐が丘特別支援学校 田丸秋穂 氏（2017-2018）
・国際学院埼玉短期大学 加藤隆芳 氏（2019-2020）、
・桐が丘特別支援学校 石田周子 氏（2021）
「肢体不自由の運動・認知特性と車いす体験」
・元桐が丘特別支援学校 A 君（車椅子生活）とご家族（A 君兄 本校卒業生）（2014-2021）
「障害のある本人及びご家庭からのお話」
・桐ヶ丘特別支援学校 B 君（高校 3 年～）（車椅子生活）とご家族（2016-2021）
「障害のある本人及びご家庭からのお話」
・心身障害児総合医療療育センター所長
小崎慶介氏（本校 OB・28 期）
「肢体に不自由があるとは」（2021）

2.3.7　知的障害

・都立墨東特別支援学校いるか分教室 佐藤比呂二氏
「自閉症の子どもたちとのかかわり」「小児がんの子どもたちとのかかわり」（2016）
・大塚筑別支援学校 安達敬子 氏（2014）
「知的障害のある児童の特性と配慮について」
・大塚筑別支援学校 杉田葉子 氏（2017）
「知的障害のある児童の特性と配慮について」
・大塚筑別支援学校 佐藤智洋 氏（2018、2019、2021）
「知的障害のある児童の特性と配慮について」
・大塚筑別支援学校 田上幸太 氏（2020）
「知的障害のある児童の特性と配慮について」

2.3.8　性的マイノリティ/HIV

・国立国際医療研究センター感染症専門医 塚田訓久氏
「免疫不全症候群(AIDS)を通して、ともにいきるを考える」（2019-2021）
・にじいろかぞく 青山真侑 氏
「さまざまな家族のかたち」（2019）
・多様な性を考える会 河野陽介 氏
「LGBTQ を使わないで」（2021）

2.3.9　ユニバーサルデザイン

・成田国際空港株式会社 山田浩介 氏（2020）、田中幸司 氏（2021）
「成田空港での UD の取組」
・(株)UDIT 関根千佳 氏
「情報の UD」
・ (株)モリサワ 高田裕美 氏
「UD フォントと、フォントデザイナーによる UD の名刺づくり」（2018）

2.3.10 吃音

・ルポライター 近藤雄生 氏 （本校 OB・43 期）
「吃音について」（2019-2020）

2.4 訪問学習

2.4.1　本学サイバニクス研究センター

（2016-2018、2020-2021）
・本学人工知能研究室 鈴木健嗣 氏
「人を支援する工学技術」「グループワーク・発表」

2.4.2　東京大学先端科学技術研究センター

・東京大学 特任講師 熊谷晋一郎 氏（2015-2018）
「しょうがいはどこにあるのか」「相模原事件から考える」「当事者研究」
・東京大学 教授 福島智 氏（本学附属盲学校卒業生）
「光も音もない世界」「指点字・点字タイプライター体験」（2015-2019）

2.5 交流・体験

2.5.1　視覚障害

・視覚特別支援学校 寄宿舎高等部生徒との交流
「生春巻きを一緒につくろう」（2015）
・視覚特別支援学校 寄宿舎高等部生徒との交流
「ランチ交流」

2.5.2　聴覚障害

・聴覚特別支援学校　高等部 1-2 年生
　「ランチセッション」「交流会」（2014-2019）
・聴覚特別支援学校　高等部 2 年生
　「異言語脱出ゲームを一緒に楽しもう」（2019）
・聴覚特別支援学校　高等部 1-2 年生
　「異言語箱をツールとしたオンライン交流」
・−Social Café−sign with me「カフェ（店内の公用語は手話）で食事」（2016-2019）
・ダイアログ・イン・ザ・ダーク [15]
　「暗闇体験・白杖体験」（2017-2019）

2.5.3　知的障害

・大塚祭の見学及び生徒交流（2011）
・科学実験を一緒に楽しむ（2014）
・ジャグリング・和太鼓ショーと科学実験（科学実験：本校科学部）（2015）
・科学実験とジャグリング を一緒に楽しむ（科学実験：東京大学 CAST[16]：CommunicAtors of Science & Technologyと本校科学部）（ジャグリングショー：本校ジャグリング部）（2016）
・ミライの体育館にてプロジェクションマッピングを活用した交流（2017-2019、2021）
・自己紹介オンライン交流（2020）

2.5.4　肢体不自由

・校内にて車椅子体験（2016）
・桐が丘特別支援学校にて車椅子体験（2016-2019）

3　受講生や修了生のさらなる活動

「ともにいきる」講座を受講した生徒が、在校中や卒業後に、自分の興味を持ったテーマで、それぞれの自分の得意な分野で、より深く学び、研究や活動に生かしている様子が見られる。以下、受講生・修了生の取り組みを紹介する。

3.1 高校 2 年現役受講生の取り組み

3.1.1　スーパーサイエンスハイスクール（以下 SSH）での発表

SSH の企画の一つとして、本校では 12 月に台中市立台中第一高級中等学校と研究発表会を行っている。本講座受講生でも過去 3 名が研究発表を行った。

・「Examining criteria of disability in two aspects;medical model and social model」（2017.12）
・「Living Together in Harmony ~Designing comfortable station for everyone~」（2019.12）

3.1.2　地域への社会貢献

講座を見学に来ていた地域の小学校校長から、「高校生が学んだことを小学生に伝えてみないか」とのお誘いがあった。現在、2021 年度受講生の有志 4 名が、小学 4 年生を対象に、「障害とは」「ユニバーサルデザイン」をテーマにして、授業を行う予定をしている。自分たちが様々な講師から学んだ知識を、小学生に伝わるように教材の内容を検討し、発表の練習をしているところである（2022 年 2 月実施）。

3.1.3　大塚特別支援学校高等部とのスポーツ交流

2020 年度受講生のうち有志数名が、ともにいきる講座と並行して、障害のある人とともに行うスポーツの開発を試みた。新型コロナウイルス感染症の影響で、直接会えなかったが、7 月には録画及びオンラインにて自己紹介交流を行い、知的障害がある生徒と一緒に行うスポーツについて検討を行った。夏休みには大塚特別支援学校高等部の石飛了一氏に具体的なアドバイスをいただきながら、自ら開発したスポーツを完成させた。しかし、緊急事態宣言が続き、一緒にスポーツすることは叶わなかった。

3.1.4　久里浜特別支援学校訪問

2019 年度受講生の有志 6 名で、久里浜特別支援学校へ訪問し、1 泊 2 日の校外学習を行った。隣接されている特別教育総合研究所内の体育施設（トランポリン）や授業見学、寄宿舎の様子等、自閉症教育の実際について学ぶことができた。

3.1.5　附属 11 校が集う共同生活への参加

本学附属学校教育局が主催する附属 11 校の生徒が集い 2 泊 3 日の共同生活（黒姫高原共同生活（2015～2018）[17]、三浦海岸共同生活（2018～2019）に率先して参加する受講生が多く、共同生活の生徒実行委員会のメンバーとして、中心となって企画運営を行っており、「ともにいきる」を実践する機会となった。

この機会を通して、自分の学校以外の多様な児童生徒と出会い、ともに時間を過ごした中で、日常的な不便（生活のしづらさ）が社会環境により作り出されていることに気づき、自分のできることを見出すきっかけとなった。

3.1.6　「共生社会を目指す芸術・文化交流の集い」での情報保障と発表

前述 3.1.4 の共同生活の実践発表の場である本学附属学校教育局主催の「共生社会を目指す芸術・文化交流の集い」にて、共同生活に参加した受講生が代表で発表を行った。また、参加する視覚に障害がある生徒のためにリーフレットの点字訳を、聴覚に障害がある人のために動画に字幕を付け、自ら手話での説明もした。作成に当たっ

ては、(株)Palabra(映画・映像の字幕、音声ガイド、多言語字幕、手話映像等の制作会社)[18]にて、音声ガイド・字幕制作について学んだ。

3.1.7　同好会「つくばっこの会」の設立

2018 年度の受講生の中の障害に関心がある生徒が中心に、本学の附属特別支援学校を含む 11 校の生徒が集い交流する同好会「つくばっこの会」を設立した。つくばっこの会は、学年を問わず他附属の生徒と交流してみたい人は誰でも参加できるものである。年に 3 回の交流会の企画運営、及び本校文化祭における手話や視野狭窄体験、点字体験などを行った。2020 年度はコロナ禍で活動が途絶えていたが、今年度はオンラインでの交流会を開催するために視覚特別支援学校の生徒とともに準備をしている。

3.1.8　手話パフォーマンス甲子園への参加

つくばっこ同好会メンバーが鳥取県で開催されている全国高校生手話パフォーマンス甲子園に、附属高校、附属坂戸高校、附属桐が丘高校の生徒とチームを組んで出場した。発表は絵本「くれよんのくろちゃん」を題材とした演劇手話パフォーマンスを行った。

3.2 修了生の高校 3 年生の取り組み

3.2.1　高校 3 年生での課題研究の継続

高校 3 年の選択授業「課題研究」(1 単位)では、高校 2 年「ともにいきる」講座で学んだ内容をもとに、自分が関心のあるテーマを設定し、1 年間かけて探究・研究をしている。毎年 1~2 名程度の生徒が選択している。この 10 年間の研究テーマは以下のとおりである。

- 「肢体不自由について」(2011)
- 「手話は言語かジェスチャーか」(2011)
- 「多文化社会を生きる」(2015)
- 「共生社会におけるボーダーの存在意義」(2015)
- 「黒姫実践報告」(2015)
- 「いま、なぜ障害を学ぶのか」(2016)
- 「声を文字に翻訳する、パソコンでの一人要約筆記の有効性と可能性」(2016)
- 「いきていく~就労から見つめる障害の今と未来」(2017)
- 「LD~「今」、知るべき障害~」(2018)
- 「ともにまなぶ~普通校で学ぶ弱視の子に対する科学実験~」(2018)
- 「上野千鶴子著「発情装置」を読んで」(2019)
- 「ともにいきるとは」(2020)

受講生は、研究内容・成果をまとめて、本校で実施している SSH 課題研究発表会にて発表を行っており、障害に関心のない生徒への障害理解の啓蒙にもつながっている。

3.2.2　個人研究

2020 年新型コロナウイルス感染症の感染拡大のさなか、4 月からの登校がままならない状況であった時期に、ともにいきる修了生の豊島慶大氏(当時高校 3 年生)が個人研究として、「点字を墨字に翻訳するアプリの開発」を行った。

彼は障害のある仲間とかかわる中で、障害者を支援するためのツールは多数存在するものの、障害者と共に活動する健常者を支援するツールが少ないことに着目をした。そこで、スマートフォンを用いた点字の打ち間違えを晴眼者自身が簡単に確認できる支援ツールの作成を試みた。この研究は日本学生科学賞にて内閣総理大臣賞を受賞しており[19]、審査員からは「障害者支援ではなく、『障害者を支援する人を支援する』という、今までの科学界にない視点」と高い評価をもらった。その後、国際的科学自由研究コンテスト ISEF(International Science and Engineering Fair)の日本代表として研究発表をした。

3.2.3　特別支援学校の校外学習サポート

2016 年度受講生数名が、視覚特別支援学校の校外学習(遊園地)のサポートボランティア(歩行介助)として同行した。

3.2.4　盲導犬の理解啓発活動への参加

2017 年度の受講生数名が、視覚特別支援学校の講師が行っている盲導犬理解啓発の活動(大学文化祭での啓発活動)にボランティア参加した。

3.2.5　聴導犬について学ぶ

2018-2019 年度受講生のうち 3 名が、津田塾大学インクルーシブ学生支援室の講座「聴導犬・介助犬の現状」に参加し、聴導犬ユーザーや聴導犬の訓練士から話を聞くとともに、聴導犬とも触れ合った。さらに津田塾大学のインクルーシブ学生支援室に赴き、支援室の理念や運営について話を聞くなど積極的にインクルーシブについて学んだ。

3.2.6　中学生の道徳にて講師

2019 年度の受講生のうち 2 名が、中学 1 年の道徳にて、一年かけて学んだ視点や経験知を、自身の言葉で語った(2020、2021)。先輩が語る「障害」は後輩に新しい視点や気づきをもたらし、その場で活発な議論も展開された。講師を務めた二人は授業内容をまとめるにあたって、「障害」について理解しきれていなかったことに気づき、後日、当時の講師である東京大学 福島智教授を訪ね、さらに学びを深めていた。

3.3 修了生の大学で継続した取り組み

3.3.1　大学でのインターンシップ

2015年度の受講生のうち1名が、晴眼者の暗闇体験と障害者の雇用・育成・活躍の場であるダイアログ・イン・ザ・ダークへ大学のインターンシップ制度を活用した研修を行った。

3.3.2　障害者をサポートする研究開発①

2016-17 年度の受講生の青木俊樹氏と中條麟太郎氏がチームとなって、聴覚障害者の情報保障の一つである字幕が、文字列だけで感情を表現しにくいことに着目し、文字に感情の情報を加えて表出する「Emotionaltext」の研究・開発を行っている [20]。この研究はコンピュータと人間に関わる多くの分野が注目する国際会議 CHI で研究が採択（2021）され、海外でも発表する予定である。

3.3.3　障害者をサポートする研究開発②

2016年度の受講生のうち1名が、デザインとものづくりの融合を目指した大学の研究室にて、「指点字デバイスを中心とした聴覚視覚の二重障害がある人に対するコミュニケーション手段」の研究プロジェクトの一員として研究に携わっている。

この受講生は本学サイバニクス研究センターの鈴木氏の講座の「人を支援する工学を考えるグループワーク」にて、指点字の情報配信デバイスについて発案・発表しており、数年後に高校時代に考えたことを大学にて実現する形となった。

3.3.4　大学にて障害者を理解するゼミの運営

2017 年度の受講生のうち 1 名（乗濱氏）が、大学で開講している「障害者のリアル」ゼミの企画・運営に携わりながら、今も当事者の生の声を聞き続けている。

この受講生とは、時折、大学でのゼミの様子や講師情報など情報交換をし続けている。

3.3.5　障害の理解啓発のプレゼン発表

2017 年受講生のうち 1 名が、EarthLightProject（様々なバックグラウンドの垣根を超えた共生をともに作り出していくプロジェクト）にて「障害者は？」と題してオンライン発表を行い [21]、現在でも障害者の理解啓発を続けている。

3.3.6　特別支援学校の校外学習サポート

2016-2017年度受講生のうち数名は、桐が丘特別支援学校の修学旅行時のサポートボランティアとして同行し、車椅子の移動介助を行った。

3.3.7　障害者スポーツボランティアに参加

2017年度及び2020年度受講生のうち2名は、大塚特別支援学校のスポーツ庁委託事業「筑波大塚チャレンジスポーツプロジェクト」[22]の活動に参加し、知的障害のある方々のスポーツボランティアをしている。彼らはこの活動に定期的に参加し、1 名はこの事業参加の経験から障害に関する方向へと進路を考えている。

3.3.8　「ともにいきる」講座の講師として

2016 年度、2019 年度の受講生のうち 2 名（中條麟太郎氏、豊島慶大氏）に、高校 2 年のともにいきる講座の講師として、現在研究している内容や活動について話してもらう機会を設けている。受講生にとっては今学んでいる内容が将来への研究につながることを知るよい機会となっている。

3.3.9　「ともにいきる」講座のサポーターとして

2016年度、2018年度、2019年度受講生のうち3名に、障害者への情報保障や講座の運営などの場面で、要約筆記や交流会のリハーサルなどのスタッフとしてサポートしてもらっている。現役受講生にとっては、卒業後も障害（者）にかかわる実践を継続している先輩に触れる良い機会となっている。

3.3.10 中学生対象の講習講師として

2021 年度に中学生徒会及び保健委員会の生徒が、附属視覚特別支援学校中学部生徒会と附属中学校生徒会との 3 校間オンライン交流を実施した。その交流会事前学習として、2019 年度受講生による「点字講習会」及び「視覚障害のある生徒との交流する際のアドバイス」の 2 回講習会を実施した。

3.3.11 「くつばこ+」の大学サークル運営

2018 年度-2019 年度の受講生のうち数名と、つくばっこ同好会の交流会に参加していたメンバーが、大学進学後、インクルーシブ社会の構築を目指し、障害の有無にかかわらず集えるサークル団体を立ち上げ、企画運営に参加している [23]。

3.3.12 視覚障害者教育の教材づくりのサポート

視覚特別支援学校の元非常勤講師で英語教育に携わっていた方から、コロナ禍でオンライン授業をすることをきっかけに、今まで対面で使用してきた教材の動画編集をしてICT教育にも対応できるようにしたいとの依頼があった。2018年度・2019年度受講生のうち2名に依頼し、視覚障害がある児童・生徒対象の英語教材（科学実験・化学反応）の作成を行った。

4　まとめと考察

4.1 講座の変遷と拡充

本稿では、10 年間の「ともにいきる」講座の変遷を振り返るとともに、受講生や修了生が講座外でも障害にかかわる活動をしている実態を取り上げた。

本講座は、身内に障害者がいることをカミングアウト出来ずにいる生徒や保護者の現状を改善したいという思いから開講した。2011 年度当初は、本学附属学校群の協力のもと、「障害を知る」「当事者と出会う」ことを中心に始め、2014 年度以降は受講生の要望や講師等の助言のもと、少しずつ講座内容の幅を広げ、本学附属特別支援学校各校の卒業生や在校生との交流なども取り入れていった。現在は、講義・体験・交流を織り交ぜた年 11～13 回のプログラム構成になっている。

年間プログラムの検討で大切な点は、高校生が興味を持ち、共感できる構成にすることである。毎回の受講後の感想や、1 年間受講後の「1 年の振り返りレポート（受講前後での障害のイメージの変化、印象に残っている内容、今後自分は何ができるのか等）」、および「受講後のアンケート（後輩にぜひ受けてほしい講座、後輩へのメッセージ、講座の改善点等）」で挙げられた意見や要望をなるべく取り入れ、高校生目線で学びたい内容に沿った講師の選定を行っている。

講師選定時に留意していることは、当事者だけでなく、家族、兄弟、医療、研究、教育、社会人、異年齢など可能な限り複数の立場の方々の話を聞けるように選ぶことである。

講座を依頼する講師の探し方はさまざまである。

① これまでの「ともにいきる」講座の講師からの紹介
② 本学附属学校教育局主催の委員会や自主参加した研修会等の講師に依頼
③ 自主的に参加したイベント等で知り合った方へ依頼
④ 障害関連の情報をインターネット検索していた際に偶然見つけた方へ直接メールや電話で依頼
⑤ 受講生の希望に合った講師を探して依頼
⑥ 卒業後も継続して障害に携わる活動をしている OB からの情報提供により依頼
⑦ OB で障害や医療に携わる方へ依頼

等の方法で講師の幅を広げてきた。

その結果、毎回、視覚、聴覚、肢体不自由、知的障害、自閉症、発達障害、LGBTQ+など異なる内容で、当事者や家族、教育者、研究者、医師がそれぞれの観点から「障害」の語りが実現できている。多様な立場の方から話を聞くことで、障害理解がより深まり、社会問題等の課題解決に向けた考え方がみえてくると考えている。

プログラムに積極的に取り入れていったことの一つとして、交流がある。交流のきっかけとなったのは、附属特別支援学校の先生方の「自校の子どもたちをぜひ知ってほしい」という強い要望であった。初年度 2011 年は、大塚特別支援学校の文化祭に参加し見学しかできなかったが、2014 年度以降は児童と受講生が一緒に楽しむイベント交流に発展させていった。また大塚特別支援学校だけでなく、他附属特別支援学校との交流も増やしていった。

その他、附属特別支援学校の卒業生・社会人へと範囲を広げ、障害者の雇用の実態などの話を聞く機会を設けていった。また、附属特別支援学校の卒業生がかかわっている異言語 Lab.や、Social cafe ”sign with me”、Dialog・in・the Dark など、校外での体験学習も積極的に取り入れている。

最近は、本校卒業生で福祉・医療の立場、障害者の支援技術を研究する立場の方や、吃音・双極性障害など自身に障害がある方に講師を依頼し、先輩から後輩に語ってもらう機会を増やしている。先輩が語る障害は、後輩に新しい視点や、障害は対岸にあるのではなく自分自身のこと、身近にあるという気づきをもたらし、後輩の心に響くことが多く、よい循環が生まれている。

10 年間実践を続けたことにより、筆者自身の障害者に対する理解が深まったと同時に、多方面から、「ともにいきる」講座に関連するさまざまな情報が集まってくるようになった。最初は点であった情報が、最近は繋がって線となり、本講座のネットワークが拡大してきている。結果、筆者の知見のみに偏らない多面的な内容のプログラム展開が可能となっていると感じている。

4.2 開講をきっかけとした校内での変化

まずは、図書スペース（本校学校図書館）への「早貸文庫」のコーナーの設置がある。図書館司書の計らいで生徒の目に触れやすい通り道に設置され、各障害や性的マイノリティ、吃音など、講師の方々の著書や障害にまつわる書籍が並んでいる。ときに発達障害の書籍を手に取ってみている生徒もおり、障害が特別なものでなくなりつつあると思われる。

二点目は、同好会「つくばっこの会」の設立である。文化祭では「視野狭窄の疑似体験」「手話クイズ」「点字あてクイズ」などのイベントを企画したり、年 3 回、本学附属学校 11 校 との交流会を学校内に認知させたことは、本校において障害の理解啓発に大きな影響をもたらしたといえよう。

三点目は、障害を語れる空間が形成できたことである。このことは、障害当事者（近藤氏、與那覇氏）である卒業生の講座や、ユニバーサルデザインの講座を全校生徒や保護者も参加できるオープン講座にしたことにより、実現可能となった。卒業生による吃音の講義のあとには、保健

室でカミングアウトしてくれた生徒もいた。

四点目は、校内で障害のある方と出会うことが特別ではなくなったということである。これは、本講座や交流会、文化祭などで車椅子ユーザーや聴覚や視覚に障害がある方など、多様な方々が来校する機会が増えたことによる。車椅子の移動では、自然と介助をする姿も見られ、本校のバリアを再認識する機会にもなっている。

五点目は、他団体とのコラボレーションである。2014 年から 2016 年度に行った大塚特別支援学校との交流では本校科学部や東大 CAST による科学実験で児童とのコミュニケーションを図った。また 2019 年度の聴覚特別支援学校との異言語脱出ゲーム交流会では物理科課題研究受講生に音や光のセンサー装置の制作を依頼し、それらを活用した交流を実現することができた。その他、交流の際には本校ジャグリング部にパフォーマンスを披露してもらった。今後も様々な団体とコラボレーション企画を見出していきたい。

六点目は、生徒の学術研究への波及である。2020 年度の本講座受講生が高校 3 年時に「点字を墨字に翻訳するアプリの開発」を行い、日本学生科学賞内閣総理大臣賞を受賞し、大きな反響を得た。障害者支援にとどまらず、「障害者を支援する人を支援する」という視点は科学界でも新しい視点と評価され、本校生徒の未知の世界を切り開く感性を高く評価したい。

最後は卒業後の修了生の活躍である。「ともにいきる」講座を選択する生徒の中には、もともと障害に興味関心が高い者が多く含まれるが、講座受講当初は消去法で選択した生徒や、確たる動機もなく受講した生徒も少なくないのが実態である。しかし、1 年間のプログラムを受講し、当事者、研究者、医者、教育者、専門家といった日常の中で出会えない人から未知の考えを聞くことにより、今後の人生に大きな変化をもたらしているものと考えられる。

受講前後のアンケートでも、障害に対する捉え方が大きく転換をした者がいることは「課題研究『ともにいきる』のプログラムの開発」第 1 報～第 4 報で述べたとおりである。

障害のある方との出会いがない・少ない本校生徒にとっては、障害（者）は遠い存在であり今後もかかわることがないと捉えている生徒がいまだ多いのが現状である。従って、新しい社会の形成者である高校生を対象に、教科教育以外の分野として扱われることの少ない障害について立ち止まって考える意義は大きいと考える。

受講生の一人が、1 年の振り返りレポートで、以下のようなことが述べられていた。「社会における障害は、やはり、多くの人があまり障害者のことをよく知らないからこそ起きている ～中略～ 自分も含め、障害者と接する機会のあった個人個人が、身近な人にだけでも発信していくことで、それが連鎖的に多くの人に影響して、社会における障害が劇的に改善することもあるかもしれない」。受講生だけでも、少しずつではあるが、その効果は波及しているようにも受け取ることができる。

障害を知ることは、自分を知ること、自分にできることが何かを考え始めることにつながっていく。ここ 10 年の取り組みを通して、筆者はこのことを徐々に実感できるようになった。今までの 10 年間を糧に、今後も、「ともにいきる」講座を駒場の探究活動として継続していきたい。

【謝辞】

本講座の実施に際しては、講師及び附属特別支援学校の児童生徒の皆様のご協力をいただきました。皆様に心から感謝の気持ちとお礼を申し上げたく、謝辞にかえさせて頂きます。

【参考文献】

1.早貸千代子他「障害科学ゼミナール「ともにいきる」の実践報告」本学附属駒場中・高等学校紀要第 54 集、2014
2.早貸千代子他「障害科学ゼミナール「ともにいきる」の実践報告 第 2 報」本学附属駒場中・高等学校紀要第 55 集、2015
3.早貸千代子他「課題研究につながる障害理解の発展的プログラム 第 3 報」本学附属駒場中・高等学校紀要第 56 集、2016
4.早貸千代子他『共生につながる大学と附属特別支援学校との連携プログラム「ともにいきる」講座の実践報告第 4 報』本学附属駒場中・高等学校紀要 59 集、2019
5. 谷内孝行「学校教育における「障害理解教育プログラム」導入の必要性」
6. 映画『ゆずり葉』DVD 2009. https://jfd.shop-pro.jp/?pid=21918789
7. Social cafe ”sign with me”、http://signwithme.in/
8. 鈴木健嗣「人間と調和した創造的協働を実現する知的情報処理システムの構築、ソーシャル・イメージング：創造的活動促進と社会性形成支援」CREST、http://social-imaging.org/crest/about/futuregym/
9.モリサワ「Windows 10 Fall Creators Update」での「UD デジタル教科書体」正式採用を発表、2017.10. https://www.morisawa.co.jp/about/news/3681
10.近藤雄生「吃音-伝えられないもどかしさ-」https://www.yukikondo.jp/

11.異言語.Lab
https://www.igengoescapegame.com/
12.成田国際空港におけるユニバーサルデザインの取り組み、2020.3
https://www.naa.jp/jp/action/cs/pdf/nrt_ud.pdf
13.「障害者のリアルに迫る」東大ゼミ
https://www.thinkdisabilityseminar.org/about-me
14.にじいろかぞく
https://queerfamily.jimdofree.com/
15. Dialog in the Dark、https://djs.dialogue.or.jp/
16. 東京大学サイエンスコミュニケーションサークル CAST、https://ut-cast.net/
17.「黒姫高原共同生活」、2016.7、本学附属学校教育局
https://www.gakko.otsuka.tsukuba.ac.jp/activity/kurohime/
18. Palabra 株式会社、https://palabra-i.co.jp/
19. 豊島慶大「点字を墨字に翻訳するアプリの開発」2020.12.24、第 64 回日本学生科学賞
https://event.yomiuri.co.jp/jssa/storage/archives/64/HIT023IT.pdf
20. 中條麟太郎他、「音声入力テキストチャットにおける発話強度に基づいた吹き出し形状自動選択システムの提案」2020.3、情報処理学会
http://www.interaction-ipsj.org/proceedings/2020/data/bib/2B-30.html
21. 乗濱俊平他「障害者って誰のコト?」2021.9
EarthLightProjecthttps://0906earthlightday.studio.design/
22. 令和 2 年度スポーツ庁委託事業「Special プロジェクト 2020（特別支援学校等を活用した地域における障害者スポーツの拠点づくり事業、筑波大塚スポーツチャレンジプロジェクト」2021
https://www.otsuka-s.tsukuba.ac.jp/page2_4.html?eid=00032
23.大学サークル「くつばこ+」（2020.4）
https://kutsubakoinclusive.wixsite.com/home

	2011 年度	2014 年度	2015 年度	2016 年度
視覚障害	・視覚特別支援学校 雷坂浩之 氏 「視覚障害の擬似体験」 ・特別支援教育ｾﾝﾀｰ間々田和彦 氏 「特別支援のノウハウを生かした理科実験」	・特別支援教育ｾﾝﾀｰ 間々田和彦 氏 「特別支援のノウハウを生かした理科実験」 ・筑波大学特別支援研究ｾﾝﾀｰ 宮崎善郎 氏 「視覚障害（者）について」 「弱視擬似体験」	・視覚特別支援学校 寄宿舎 飯島美帆 氏 「視覚障害（者）理解」「弱視擬似体験」 ・東京大学先端科学技術研究ｾﾝﾀｰ 教授 福島智氏（訪問） 「光も音もない世界」「指点字・点字ﾀｲﾌﾟ ﾗｲﾀｰ体験」	・視覚特別支援学校 寄宿舎 飯島美帆 氏 「視覚障害（者）理解」「弱視擬似体験」 ・東京大学先端科学技術研究ｾﾝﾀｰ 教授 福島智氏（訪問） 「光も音もない世界」「指点字・点字ﾀｲﾌﾟ ﾗｲﾀｰ体験」
視覚交流	・視覚特別支援学校 卒業生 森敦史 氏（全盲聾） 「文字盤を活用した交流、指文字の講習」		・視覚特別支援学校（訪問） 寄宿舎高等部生徒との交流 「生春巻きを一緒につくろう」	
聴覚障害	・聴覚特別支援学校 鈴木牧子 氏 「聴覚障害と口話・読話」 「難聴擬似体験学習」	・聴覚特別支援学校 鈴木牧子 氏 「聴覚障害と口話・読話」 「難聴擬似体験学習」 ・聴覚特別支援学校卒業生 柳匡裕 氏(ありがとうの種及び Social Cafe Sign with Me ｵｰﾅｰ) 「ろう者が望む社会」日本手話通訳２名あり	・聴覚特別支援学校 鈴木牧子 氏 「聴覚障害と口話・読話」 「難聴擬似体験学習」 ・聴覚特別支援学校卒業生 柳匡裕 氏(ありがとうの種及び Social Cafe Sign with Me ｵｰﾅｰ) 「ろう者が起業するということ」日本手話通訳２名あり ・東京大学医学部 鉄門手話の会代表 辻賢太郎氏（OB） 「聴覚障害と医療 –その溝を埋めるには–」	・聴覚特別支援学校 鈴木牧子 氏 「聴覚障害と口話・読話」 「難聴擬似体験学習」 ・聴覚特別支援学校卒業生 柳匡裕 氏(ありがとうの種及び Social Cafe Sign with Me ｵｰﾅｰ) 「ろう者が起業するということ」日本手話通訳２名あり ・ﾀﾞｲｱﾛｸﾞ・ｲﾝ・ｻﾞ・ﾀﾞｰｸ 「暗闇体験・白状体験」
聴覚交流		・聴覚特別支援学校（訪問） 高等部 1-2 年生徒 「ランチ＆交流会」	・聴覚特別支援学校（訪問） 高等部 1-2 年生徒 「ランチ＆交流会」	・聴覚特別支援学校（訪問） 高等部 1-2 年生徒 「ランチ＆交流会」
聴覚 DVD	・日本ろうあ協会制作の映画「ゆずり葉～君もまた次のきみへ～」DVD 鑑賞			

	2017年度	2018年度	2019年度	2020年度	2021年度
視覚障害	**・視覚特別支援学校 寄宿舎 飯島美帆 氏** 「視覚障害（者）理解」「弱視擬似体験」 **・東京大学先端科学技術研究ｾﾝﾀｰ 教授 福島智氏（訪問）** 「光も音もない世界」「指点字・点字ﾀｲﾌﾟﾗｲﾀｰ体験」	**・視覚特別支援学校 寄宿舎 飯島美帆 氏** 「視覚障害（者）理解」「弱視擬似体験」 **・東京大学先端科学技術研究ｾﾝﾀｰ 教授 福島智氏（訪問）** 「光も音もない世界」「指点字・点字ﾀｲﾌﾟﾗｲﾀｰ体験」	**・視覚特別支援学校 山口崇 氏** 「視覚障害（者）理解」「弱視擬似体験」 **・東京大学先端科学技術研究ｾﾝﾀｰ 教授 福島智氏（訪問）** 「光も音もない世界」「指点字・点字ﾀｲﾌﾟﾗｲﾀｰ体験」 **・東京大学先端科学技術ｾﾝﾀｰ（訪問） 特任研究員 大河内直之 氏** 「視覚障害・ﾊﾞﾘｱﾌﾘｰｺﾝﾌﾘｸﾄ」	**・視覚特別支援学校 山本夏幹 氏** 「ブラインドサッカー・視覚障害を理解する」 **・東京都盲ろう者支援ｾﾝﾀｰ 渡井秀匡 氏（難聴、全盲当事者）・渡井真奈 氏（盲ろう向け通訳・介助者）** 「盲ろう者を知ってますか」	**・視覚特別支援学校（訪問） 山本夏幹 氏** 「ブラインドサッカー・視覚障害を理解する」
視覚交流		**・視覚特別支援学校（訪問） 寄宿舎高等部生徒との交流** 「ランチ交流」			
聴覚障害	**・聴覚特別支援学校 鈴木牧子 氏** 「聴覚障害と口話・読話」「難聴擬似体験学習」 **・聴覚特別支援学校卒業生 柳匡裕 氏**(ありがとうの種及び Social Cafe Sign with Me ｵｰﾅｰ) 「ろう者が起業するということ」日本手話通訳２名あり **・ﾀﾞｲｱﾛｸﾞ・ｲﾝ・ｻﾞ・ﾀﾞｰｸ** 「暗闇体験・白状体験」	**・聴覚特別支援学校 鈴木牧子 氏** 「聴覚障害と口話・読話」「難聴擬似体験学習」 **・聴覚特別支援学校卒業生 柳匡裕 氏**(ありがとうの種及び Social Cafe Sign with Me ｵｰﾅｰ) 「ろう者が起業するということ」日本手話通訳２名あり **・ﾀﾞｲｱﾛｸﾞ・ｲﾝ・ｻﾞ・ﾀﾞｰｸ** 「暗闇体験・白状体験」	**・聴覚特別支援学校 鈴木牧子 氏** 「聴覚障害と口話・読話」「難聴擬似体験学習」 **・聴覚特別支援学校卒業生 柳匡裕 氏**(ありがとうの種及び Social Cafe Sign with Me ｵｰﾅｰ) 「ろう者が起業するということ」日本手話通訳２名あり	**・異言語ラボ 代表 菊永ふみ 氏** 「聴覚障害者との交流について」 **・筑波技術大学 須田裕之 氏（OB）** 「工学技術と聴覚支援、ﾕﾆﾊﾞｰｻﾙﾃﾞｻﾞｲﾝ」	**・東京大学 中條 麟太郎 氏（OB）** 「障害とは」「聴覚障害者と情報保障」 **・筑波技術大学 須田裕之 氏（OB）** 「工学技術と聴覚支援、ﾕﾆﾊﾞｰｻﾙﾃﾞｻﾞｲﾝ」 **・ﾕﾆﾊﾞｰｻﾙﾃﾞｻﾞｲﾝｱﾄﾞﾊﾞｲｻﾞｰ 松森果林 氏** 「音のない世界と音のある世界をつなぐ」
聴覚交流	**・聴覚特別支援学校（訪問） 高等部１-２年生徒** 「ランチ&交流会」	**・聴覚特別支援学校（訪問） 高等部１-２年生徒** 「ランチ&交流会」	**・聴覚特別支援学校（訪問） 高等部１-２年生徒** 「ランチ&交流会」 **・聴覚特別支援学校高等部** 「異言語脱出ゲームを一緒に楽しもう」（物理課題研究	**・聴覚特別支援学校（オンライン）** 高等部１-２年生 「異言語箱をツールとしたオンライン交流」	**・聴覚特別支援学校（訪問）** 高等部１-２年生 「交流・情報保障と要約筆記」
聴覚DVD					

	2011 年度	2014 年度	2015 年度	2016 年度
知的障害		・大塚筑別支援学校 安達敬子 氏 「知的障害のある児童の特性と配慮について」		・都立墨東特別支援学校いるか分室 佐藤比呂二 氏 「自閉症の子どもたちとのかかわり」「小児がんの子どもたちとのかかわり」
大塚交流	・附属大塚特別支援学校中学部（訪問） 大塚祭の見学及び生徒交流	・附属大塚特別支援学校小学部（訪問） 科学実験を一緒に楽しむ	・本校にて ｼﾞｬｸﾞﾘﾝｸﾞ・和太鼓ｼｮｰと科学実験（科学実験：本校科学部・ｼﾞｬｸﾞﾘﾝｸﾞｼｮｰ：本校ｼﾞｬｸﾞﾘﾝｸﾞ部）	・本校にて 科学実験とｼﾞｬｸﾞﾘﾝｸﾞを一緒に楽しむ（科学実験：東大Castと本校科学部）（ｼﾞｬｸﾞﾘﾝｸﾞｼｮｰ：本校ｼﾞｬｸﾞﾘﾝ
肢体不自由	・桐が丘特別支援学校 城戸宏則 氏 「肢体不自由の運動・認知特性と車いす体験」	・桐が丘特別支援学校 城戸宏則 氏 「特別支援教育・肢体不自由教育（総論）」 ・桐が丘特別支援学校 城戸宏則 氏 「肢体不自由の運動・認知特性と車いす体験」 ・元桐が丘特別支援学校A 君（車椅子生活）とご家族「当事者からのお話」	・桐が丘特別支援学校 城戸宏則 氏 「肢体不自由の運動・認知特性と車いす体験」 ・元桐が丘特別支援学校A 君・B 君（車椅子生活）とご家族「当事者からのお話」 ・東京大学先端科学技術研究ｾﾝﾀｰ特任講師 熊谷晋一郎 氏 「障害はどこにあるのか」「当事者研究」 ・校内にて車椅子体験	・桐が丘特別支援学校 城戸宏則 氏 「肢体不自由の運動・認知特性と車いす体験」 ・元桐が丘特別支援学校A 君・B 君（車椅子生活）とご家族「当事者からのお話」 ・東京大学先端科学技術研究ｾﾝﾀｰ特任講師 熊谷晋一郎 氏 「相模原事件から考える」「当事者研究」 ・桐が丘特別支援学校にて車椅子体験
発達障害・学習障害		・大塚特別支援学校 安部博志 氏 「特別支援教育・発達障害について」	・特別支援教育研究ｾﾝﾀｰ長 柘植雅義 氏 「障害とは何か？発達障害とは（総論）」「ｸﾞﾙｰﾌﾟﾜｰｸ」	・特別支援教育研究ｾﾝﾀｰ長 柘植雅義 氏 「障害とは何か？発達障害とは（総論）」「ｸﾞﾙｰﾌﾟﾜｰｸ」 ・筑波大学 副学長・小児科医 宮本 信也 氏 「障害とは」発達障害を通して理解する
科学・工学的な支援			・東京大学先端科学技術研究ｾﾝﾀｰ 所長 児玉龍彦氏（OB）（訪問） 「科学の見通しとﾊﾞﾘｱﾌﾘｰについて」	・筑波大学ｻｲﾊﾞﾆｸｽ研究ｾﾝﾀｰ人工知能研究室 鈴木建嗣 氏 「人を支援する工学技術」「ｸﾞﾙｰﾌﾟﾜｰｸ・発表」

	2017年度	2018年度	2019年度	2020年度	2021年度
知的障害	・大塚筑別支援学校 杉田葉子 氏 「知的障害のある児童の特性と配慮について」	・大塚筑別支援学校 佐藤智洋 氏 「知的障害のある児童の特性と配慮について」	・大塚筑別支援学校 佐藤智洋 氏 「知的障害のある児童の特性と配慮について」	・大塚筑別支援学校 田上 幸太 氏(ｵﾝﾗｲﾝ) 「知的障害のある児童の特性と配慮について」 ・パラリンピック運営委員 近藤邦夫氏	・大塚筑別支援学校 佐藤智洋 氏 「知的障害のある児童の特性と配慮について」
大塚交流	・附属大塚特別支援学校小学部(訪問) ﾐﾗｲの体育館にてﾌﾟﾛｼﾞｪｸｼｮﾝﾏｯﾋﾟﾝｸﾞを活用した交流	・附属大塚特別支援学校小学部(訪問) ﾐﾗｲの体育館にてﾌﾟﾛｼﾞｪｸｼｮﾝﾏｯﾋﾟﾝｸﾞを活用した交流	・附属大塚特別支援学校小学部(訪問) ﾐﾗｲの体育館にてﾌﾟﾛｼﾞｪｸｼｮﾝﾏｯﾋﾟﾝｸﾞを活用した交流	・自己紹介オンライン交流 ・大塚中学部と一緒に遊ぶスポーツ開発「ともレク」	・附属大塚特別支援学校小学部(訪問) ・お楽しみ会参加 ・ﾐﾗｲの体育館にてﾌﾟﾛｼﾞｪｸｼｮﾝﾏｯﾋﾟﾝｸﾞを活用した交
肢体不自由	・桐が丘特別支援学校 田丸秋穂 氏 「肢体不自由の運動・認知特性と車いす体験」 ・元桐が丘特別支援学校 A君・B君(車椅子生活)とご家族「当事者からのお話」 ・東京大学先端科学技術研究ｾﾝﾀｰ特任講師 熊谷晋一郎 氏 「障害がどこにあるのか」「当事者研究」 ・桐が丘特別支援学校にて車椅子体験	・桐が丘特別支援学校 田丸秋穂 氏 「肢体不自由の運動・認知特性と車いす体験」 ・元桐が丘特別支援学校 A君・B君(車椅子生活)とご家族「当事者からのお話」 ・東京大学先端科学技術研究ｾﾝﾀｰ特任講師 熊谷晋一郎 氏 「障害はどこにあるのか」「当事者研究」 ・桐が丘特別支援学校にて車椅子体験	・桐が丘特別支援学校 加藤隆芳 氏 「肢体不自由の運動・認知特性と車いす体験」 ・元桐が丘特別支援学校 A君・B君・C君(車椅子生活)とご家族「当事者からのお話」 ・桐が丘特別支援学校にて車椅子体験	・国際学院埼玉短期大学 加藤隆芳 氏 「肢体不自由の運動・認知特性と車いす体験」 ・元桐が丘特別支援学校 A君・B君・C君(車椅子生活)とご家族「当事者からのお話」	・桐が丘特別支援学校 石田周子 氏 「肢体不自由の運動・認知特性と車いす体験」 ・元桐が丘特別支援学校 A君・B君・D君(車椅子生活)とご家族「当事者からのお話」 ・心身障害児総合医療療育ｾﾝﾀｰ 所長 小崎慶介氏(OB) 「肢体に不自由があるとは」
発達障害・学習障害	・特別支援教育研究ｾﾝﾀｰ長 柘植雅義 氏 「障害とは何か?発達障害とは(総論)」「ｸﾞﾙｰﾌﾟﾜｰｸ」 ・筑波大学 副学長・小児科医 宮本 信也 氏 「障害とは」発達障害を通して理解する	・特別支援教育研究ｾﾝﾀｰ長 柘植雅義 氏 「障害とは何か?発達障害とは(総論)」「ｸﾞﾙｰﾌﾟﾜｰｸ」 ・白百合女子大学・小児科医 宮本 信也 氏 「障害とは」発達障害を通して理解する ・もじこ塾(英語教育) 成田あゆみ 氏 「英語のディスレクシア」	・特別支援教育研究ｾﾝﾀｰ長 柘植雅義 氏 「障害とは何か?発達障害とは(総論)」「ｸﾞﾙｰﾌﾟﾜｰｸ」 ・白百合女子大学 ・小児科医 宮本 信也 氏 「障害とは」発達障害を通して理解する	・白百合女子大学 ・小児科医 宮本 信也 氏 「障害とは」発達障害を通して理解する(動画)	・白百合女子大学 ・小児科医 宮本 信也 氏 「障害とは」発達障害を通して理解する(動画) ・日本発達障害ネットワーク 橋口亜希子 氏 「発達障害を通して障害とは何かを問う」
科学・工学的な支援	・筑波大学ｻｲﾊﾞｰﾆｸｽ研究ｾﾝﾀｰ 人工知能研究室 鈴木建嗣 氏(訪問) 「人を支援する工学技術」「ｸﾞﾙｰﾌﾟﾜｰｸ・発表」	・筑波大学ｻｲﾊﾞｰﾆｸｽ研究ｾﾝﾀｰ 人工知能研究室 鈴木建嗣 氏(訪問) 「人を支援する工学技術」「ｸﾞﾙｰﾌﾟﾜｰｸ・発表」	・筑波大学ｻｲﾊﾞｰﾆｸｽ研究ｾﾝﾀｰ 人工知能研究室 鈴木建嗣 氏(訪問) 「人を支援する工学技術」「ｸﾞﾙｰﾌﾟﾜｰｸ・発表」	・筑波大学ｻｲﾊﾞｰﾆｸｽ研究ｾﾝﾀｰ長 鈴木建嗣 氏 (ｵﾝﾗｲﾝ) 「人を支援する工学技術」「ｸﾞﾙｰﾌﾟﾜｰｸ・発表」	・筑波大学ｻｲﾊﾞｰﾆｸｽ研究ｾﾝﾀｰ長 鈴木建嗣 氏 (ｵﾝﾗｲﾝ) 「人を支援する工学技術」

	2011年度	2014年度	2015年度	2016年度
ﾕﾆﾊﾞｰｻﾙﾃﾞｻﾞｲﾝ				
精神障害				
吃音				
性的マイノリティ				

	2017年度	2018年度	2019年度	2020年度	2021年度
ﾕﾆﾊﾞｰｻﾙﾃﾞｻﾞｲﾝ		・㈱モリサワ 高田裕美 氏 「UD ﾌｫﾝﾄと、ﾌｫﾝﾄﾃﾞｻﾞｲﾅｰによるﾕﾆﾊﾞｰｻﾙﾃﾞｻﾞｲﾝの名刺づくり」		・成田国際空港株式会社 山田浩介 氏 「成田空港でのﾕﾆﾊﾞｰｻﾙﾃﾞｻﾞｲﾝの取組」	・成田国際空港株式会社 田中幸司 氏 「成田空港でのﾕﾆﾊﾞｰｻﾙﾃﾞｻﾞｲﾝの取組」 ・(株)UDIT 関根千佳 氏 「情報のﾕﾆﾊﾞｰｻﾙﾃﾞｻﾞｲﾝ」
精神障害	・東京大学 精神科医 佐々木司 氏 「精神障害の基礎知識を学ぶ」			・東京大学 精神科医 渡邊慶一郎氏（ｵﾝﾗｲﾝ） 「発達・精神障害の支援」	・東京大学 精神科医 渡邊慶一郎氏（ｵﾝﾗｲﾝ） 「発達・精神障害の支援」 ・博士（学術） 與那覇 潤 氏（OB） 「双極性障害の当事者として」
吃音			・ﾙﾎﾟﾗｲﾀｰ 近藤雄生 氏（OB）「吃音について」	・ﾙﾎﾟﾗｲﾀｰ 近藤雄生 氏（OB）（ｵﾝﾗｲﾝ）「吃音について」	
性的マイノリティ				・国立国際医療研究ｾﾝﾀｰ 塚田訓久 医師 「免疫不全症候群(AIDS)を通して、ともにいきるを考える」 ・にじいろかぞく 青山真侑 氏 「さまざまな家族のかたち」	・国立国際医療研究ｾﾝﾀｰ 塚田訓久 医師 「免疫不全症候群(AIDS)を通して、ともにいきるを考える」 ・多様な性を考える会 河野陽介 氏 「LGBTQ を使わないで」